

# 富山県立高岡工芸学校



富山県立工芸学校（明治35年）

## 高岡の工芸学校

明治27年（1894）6月、政府は「実業教育費国庫補助法」を公布しました（施行は同年9月）。「工業・農業・商業学校」などに対して、国が補助金を交付することを定めたものでした。高岡市長・堀二作（県会議長を兼任）は、この機会をとらえ、高岡に工芸学校を作ることを富山県知事・徳久恒範に提案します。こうした誘致運動は綱引きになることも珍しくありませんが、堀二作の周到な議会対策もあって、明治27年10月に富山県立工芸学校が誕生しました（明治34年に富山県立工芸学校、昭和16年に富山県立高岡工芸学校、昭和23年に富山県立高岡工芸高等学校と改称）。高岡では初めての中等教育機関でした（県立高岡高校の創設は明治31年）。

徳久知事の方も、産業振興には大いに意欲を持っていました。高岡では富山県立工芸品陳列場も開いていますし（明治26年4

月）、工芸学校と同じ月には福野に富山県簡易農学校（今の県立南砺福野高等学校）も開きました。徳久は旧佐賀藩士で、富山県知事になる前は石川県書記官を務めていました。その間の明治20年（1887）7月、金沢区工業学校（今の石川県立工業高等学校）が開かれています。その初代校長は、徳久と同じ佐賀出身の納富介次郎でした。徳久は、高岡の工芸学校にも納富を招きました。

## 初代校長・納富介次郎

納富は弘化元年（1844）の生まれ、チェコやフランスで陶磁器の製造法を学び、帰国後は輸出工芸の振興に力を尽くした人でした。明治20年代まで、日本の年間総輸出額の10分の1は工芸品が稼ぎ出していたという話があります。長く鎖国していたこともあって、精密な技をこらした日本の工芸品は、大いに珍しがられたのです。納富は、日本の輸出工芸をさらに美しく

するため、政府が行っていたデザイン指導の中心人物でした。また、工業的な製造法や、同業者組合の組織なども研究していました。

しかし、明治の半ばを過ぎると、たとえば八幡に製鉄所ができるなど、日本の産業は手工業から機械工業・重工業へと転換していきます。納富が手掛けてきた仕事は、時代に合わないものになろうとしていました。彼が金沢や高岡のような地方工芸産地の指導に転身したのは、そういう時代だったのです。

他の町では高岡に新しい学校が作られたことを面白く思わない向きもありました。富山県には流れの激しい川が多く、たびたび水害や土砂崩れが起こっていました。そこで県の年間予算は、その約9割が土木費に費やされる時さえありました。徳久知事は、それを高岡の工芸学校のような、教育と産業振興のために割いたのです。知事と県議会の関係は緊張し、不信任案が可決されるに至ります。このため、徳久知事は香川県に転任することになりました。徳久は高松に香川県工芸学校（今の香川県立高松工芸高等学校）を作り、その初代校長にも納富を招きました。香川県では名知事と慕われたようです。

## 大正期の激動

銅器や漆器の仕事は、親方の下で働きながら身につけるものでした。せっかく開かれた高岡の工芸学校でしたが、そういう仕事を学校で勉強するというのを、理解しない人たちも多かったのです。大正6年（1917）に工芸学校に入り、後に歌人となった大坪晶一によれば、この頃の卒業生は「生意気で、技術者としては中途半端」と見られることもあったようです（『自叙伝 青春挽歌』短歌時代社、1965年、11頁）。問屋制家内工業という高岡の産業構造には、行政主導の近代化にはなじまない面がありました。

こうした状況が変わったのが、第4代校長の伊藤宣良の時でした。明治43年（1910）に校長となり、大正15年（1926）に退任するまで、その在職期間は歴代最長です。大正2年（1913）、工芸学校に隣接して、富山県工業試験場（今の富山県工業技術センター）が開かれます。場長以下の職員は伊藤校長はじめ教員が兼務し、実業教育と業界指導を一体的に手掛け、新素材・新技法の研究開発も行われました。さらに大正8年（1919）には、工芸学校に工芸部のほか応用化学部と機械電気部が新設され、定員が一挙に3倍になります。「工芸」だけでなく、「工業」の学校として新たな役割を果たそうとしたわけです。現在の県立工芸高校のかたちは、この時に始まったと言えます。

伊藤校長は正に工芸学校の中興の祖でしたが、その去り方は

残念なものでした。大正15年3月のこと、菓子折を持って来た生徒の懇願に折れて成績簿を書き直し、上級学校への推薦書も書いてやったというのです。何かと鷹揚な時代らしいことだったわけですが、これが背任行為であると大きく報道されてしまいました。伊藤校長は即座に辞表を出しましたが、以後も新聞各紙は連日の報道合戦を続けています。同窓会には工芸から工業へと重心を移した母校に不満を抱く向きが多く、教員も工芸派と工業派に分かれて対立する中で起こった事件でした。

## 多士済々の卒業生

伊藤校長の事件は、創立から20年を経た高岡の工芸学校が、その存在感を大きく増したことも伝えているでしょう。工芸から工業へと展開する高岡の産業構造の変化の中で、この学校も不安定にならざるを得なかったように思われます。高岡の工芸学校の歴史は、20世紀以後の我が国の産業史・工芸史・美術史を考える上で、非常に興味深く、重要なものです。

その卒業生には、多士済々の人物が輩出されています。ここでは限られた故人の名前をあげるにとどめますが、まず彫刻家・本保義太郎（1875～1907）は、日本人彫刻家として初めてパリの伝統ある公募展「サロン」に入選、ロダンから激励を受けましたが、若くしてパリで客死しています。畑正吉（1882～1966）も彫刻家、文化勲章を始めとする勲章のデザインも手掛けました。昭和8年（1933）に開眼式を開いた高岡大仏を代表作とする彫刻家・中野双山（1881～1940）や、デザイナー・国井喜太郎（1883～1967）は、この畑の親友でした。国井が初代所長を務めた商工省工芸指導所は、ドイツの建築家ブルーノ・タウトを招くなど、日本のモダンデザインの原点となります。

日本画家・郷倉千靱（1892～1975）と漆芸家・山崎覚太郎（1899～1984）は、共に日本芸術院会員。山崎は文化功労者ともなり、日展の総帥として美術界に強い影響力を及ぼしました。デパートの丸井の創業者・青井忠治（1904～1975）のような財界人も出ています。金工家・金森映井智（1908～2001）は、県在住者初の人間国宝でした。漫画家・藤子・F・不二雄（1933～1996）は、『ドラえもん』などが全世界に親しまれる巨匠です。金工家・大角勲（1940～2010）は、県在住者として初めて日本芸術院賞を受賞しています。納富初代校長以来、「尚美」（美をたつとぶ）の二文字を掲げる「工芸」の校風は、幅広い才能を育んで来たのです。

（文責・藤井素彦、2012年3月）